



英国カブリエシアンティフィーク見聞録 (1)
 ブライトンサイエンスフェスティバルと
 ダナ・センターイベントに参加して

佐々義子

はじめに

2月17日から25日、ブライトンサイエンスフェスティバル、ダナ・センター(ロンドン自然史科学館)のイベントに参加した。

筆者の所属するNPO法人くらしとバイオプラザ21は2005年3月よりバイオテクノロジーと人々のくらしの視点に特化した日本版サイエンスカフェとして「バイオカフェ」を開催しており、開催場所は札幌から沖縄まで、開催回数は60回を超えている¹⁾。一方、日本国内では、2004年度科学技術白書でイギリスのサイエンスカフェが紹介されたことから、全国でサイエンスカフェが開催され、ポータルサイトが作られ、多くのブログも開かれている。

サイエンスカフェは、フランスの哲学カフェにヒン

トを得てイギリスで“カフェ・シアンティフィーク”として誕生した。このため、人前で発言したり知らない人と話し合ったりすることが苦手である日本人にとって、サイエンスカフェがサイエンスコミュニケーションの手法として有効であるのかという課題が、日本のサイエンスカフェ関係者の間でさかんに議論されてきた。そこで、今回の視察では、サイエンスカフェ発祥の地に住む人々のディスカッションの実態、参加者同士の話し合いの活発さ、スピーカーの話し方、ファシリテーターの進め方などの関心事をぜひ確かめてきたいと思った。くらしとバイオプラザ21のバイオカフェおよびその他の日本で行われているサイエンスコミュニケーションの活動と比較しながら報告したい。

1. 4つのサイエンスカフェ

本視察では、4カ所6回のサイエンスカフェに参加した。その中で印象に残った4つのサイエンスカフェに絞って以下に報告する。

○スピーカーズオンステージ (ビッグサイエンスサウンダー)

スピーカーズオンステージは今回の視察の中心であ



写真1
 ビッグサイエンスサウンダーのパフレット

筆者紹介：さっさ・よしこ NPO法人「くらしとバイオプラザ21」主任研究員 専門：バイオテクノロジーとパブリックアクセプタンス 連絡先：〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-5-3 E-mail sassa@life-bio.or.jp (勤務先)



写真2 コメディアの地階の会場は200名くらい入る

るブライトンサイエンスフェスティバルの中の最大のイベント「ビッグサイエンスサンデー」の目玉で、2月18日午後に行われた。会場はコメディアという繁華街のクラブの1階、地階の2つ。1コマは45分で、2会場において8テーマが扱われた。参加費は8ポンドで、すべて予約制だが、両会場は合せて400名ほどの参加者で満員だった。

今回の視察で最も知りたかった会場内の質疑応答は、期待に反しスピーカーと参加者という2者間のもので、会場内の横方向の対話はみられなかった。しかし、共通して言えたことはスピーチが短いこと。1人の持ち時間は90分だが、スピーチは基本的に20～30分。司会者はおらず、基本的にスピーカーが直接会場とやり取りしていた。テンポや声色に変化をつけて、笑い声がよく起こり、巧みな話術で会場を引き付け、液晶プロジェクターで示された絵や写真もせいぜい10数枚であった。例外として、ベン・ゴールドエイカー氏の「バッドサイエンス」では、スピーカーの「パブリックエンゲージメントが大事だから、そろそろスピーチを終わりたいと思う」という言葉に、会場から、時間いっぱい話してほしいと要望したケースがあった。同氏はガーディアンでコラムを持っており、会場にファンが多かったことも影響しているよう。

○カタリストクラブ

ブライトンピアに近いジョーグルベリープレイハウスの地下のシアターで、20時から23時まで、3人のスピーカー(1人1時間)によってトークと話し合いが

行われた。参加費は5ポンド。カタリストクラブは熱意のある人が語る月1回のイベントで、サイエンスフェスティバル代表のロビンソン氏に言わせると、「このように常連がいるイベントにぶつけることで、サイエンス関連のトピックスを扱っても人が集まるようにした」とのことであった。

ここでもスピーチは20分と短かった。さらに驚かされたのが、会場内での横方向の意見交換の活発さで、スピーカーそっちのけで、縦横無尽に発言が飛び交っていた。

○カフェシアンティフィークブライトン

カフェシアンティフィークのホームページ²⁾に地図とともに図示されているが、イギリス国内のカフェシアンティフィークはそれぞれが全く独立しており、運営方法も異なっている。カフェシアンティフィークブライトンは3名の有志の意志で行われており、すでに4年続いている。6カ月先までのスケジュールを決めて進める周到な準備の賜物だろう。

2月20日はEuropean Medical Progressのマーガレット・ブラウンさんが動物実験についてスピーチした。会場には動物実験廃止運動をしている人たちも参加し、大変激しい議論になった。時間配分はスピーチ20分、休憩(個々の話し合い、カフェシアンティフィークの連絡を含む)20分で全体討論を加えて、合計90分。

このような対立しやすいテーマは、サイエンスカフェのようなコミュニケーションに適しているのかと



写真3 カタリストクラブ会場

という議論がある。リーズのカフェシアンティフィークの発起人の1人であるシェークスピア氏は、「対立的なテーマに挑戦することは重要であるが、毎回では参加者は嫌気がさしてしまうので、そのことは配慮する必要がある」と言われている³⁾。実際、筆者の隣の動物実験廃止運動家は、「もう参加することもないので、MLにも登録しない」と言って帰って行った。筆者らのくらしとバイオプラザ21でも、医薬品などを扱うときは大変に気を配るし、談話会(事務所で夜2時間、濃いディスカッションをする)で扱うか、バイオカフェにするかを検討することもある。改めて対立しやすいテーマの扱いの難しさを感じた。しかし、今回は3人の世話人やスピーカーが感情的にならずに対応しており、バイオカフェで毎回司会をしている筆者には大変勉強になった。

○ ダナ・センター

ダナ・センターは自然史博物館と連携して活動している大人のためのスペースで、ウェルカム・トラストなど4つの財団から主な寄付を受けて運営されている^{4),5)}。毎週、火曜、水曜、木曜の夜にイベントを行っており、月1回のダナ・ディナー(13ポンドで飲み物、菜食用とそれ以外でチョイスする2種類のメインディッシュ、デザート。支払いは当日、レストランに対して直接行う)以外はすべて無料だが、事前予約制である。

2月21日はダナ・ディナーでBBCプレゼンターの



写真4 ポール・ローズ氏と筆者

ポール・ローズ氏の「深海探検」であった。18:30からディナーが始まり、19:00開会。アラスカの深海の写真を基に20分のスピーチ、30分のデザートタイム、質疑応答がなされ20:00過ぎに終了した。ファシリテーターは無理に会場に質問を投げ掛けたりせずにあっさりした運営であるという印象を受けた。これは、ビッグサイエンスサンデーでも感じたことだが、ファシリテーターはあまり介入しない。日本のサイエンスカフェには、ファシリテーターの力量が市民への語り掛けに慣れないスピーカーを補うくらい、その重要性を認めているところもある。イギリスのあっさりしたファシリテーションは意外であったが、好感が持てた。会場参加者は、友達、カップル、個人の参加者がディナーを楽しむことを主目的に来ているような感じで、イベントが終わってもそれぞれのおしゃべりを続けていた。

翌22日は、「LGH safe Sex」というイベントが行われた。19:30から21:00までキャバレーの現役の役者4名、専門家(公衆衛生学研究者、看護師など)6名を交えて参加者(22名)も3つのグループに分かれ、ドラマ仕立ての実験が行われた。目的は性感染症に対する情報提供で、参加者も男性同士、女性同士、男女などのカップルがほとんどだった。役者や専門家にグループごとで質問をし、初めに配布された質問用紙に回答しながら、3つの場面を回っていく。すべての回答がうまると、3つの場面それぞれで誰から誰にどんな感染症がうつされたかがわかる仕組みになっている。その中で、性感染症について知り、予防法を学ぶ。最後に、各自がボタンを押して結果がスクリーンに表示され、正答が示された。シナリオに従って運営され、終了は20:40だった。ここでも参加者はそれぞれのグループでおしゃべりを続け、夜は更けていった。

このイベントはウェルカム・トラストの支援を受けていることもあり、自然科学館からも評価者が参加していた。会場では前日と同じアンケート(参加理由や参加者の属性などを調べるもの)が行われた上に、自宅には事後アンケート(イベントに対する感想などの定性的な調査)がメールで届いていた。

2. 日本でサイエンスカフェは定着するのか

初めに述べた、「議論が不得意な日本人にとってサ

「イエンカフェの実施は可能か」という問題に立ち返って考えてみる。前述の数カ所のサイエンカフェの見学の感想としては、イギリス人だからといって、どこでも活発な議論が起こるわけではないというのが結論である。当然のことであるが、どんな国民性を持つ人でも、初めての場所で初めての人とはすぐに話は弾まないようだ。

ブライトンのビッグサイエンスサンデーの3R (reduce, reuse, recycle)フォーラム(スピーカーズオンステージの前に20～30人の市民が参加し、数名のスピーカーの短いスピーチのあと、それぞれのスピーカーを囲んで自由に話し合う)参加者に尋ねたところ、ポスターやチラシをみて来た人のほとんどは「初めての参加者」で、一緒に来た友人や家族とは話しても、誰も議論を始めるわけではなかった。

スピーカーズオンステージには、アリーナ(ビッグサイエンスサンデーの会場で、いろいろなグループがブースを出して行う展示会のようなイベント)や25日のファミリーデー(生徒たちが中心になって行うイベント)に子どもが参加するので、子どもに付いて来たという人や、スピーカーに著名な人が多いことをチラシで知ったというリタイヤした大学教員などが参加していた。サイエンスフェスティバルのような科学のイベントは初めてだと答える人がほとんどだった。これはダナ・ディナーでも同じで、サイエンスコミュニケーションの盛んなイギリスでも、チャンスがないとサイエンスに関わるイベントを知らずに過ごしている市民は多いのだと思った。

その点、カタリストクラブは常連が多いので、本当に活発な参加者間の横方向の議論が広がり、スピーカーが話しの輪から出てしまう場面すら見られた。とても迫力のあるディスカッションであった。

カフェシアンティフィークブライトンには常連がある程度はいるものの、今回は動物実験という挑戦的なテーマを扱ったことと、ブライトンサイエンスフェスティバルのチラシに掲載されたために新しい参加者が多かったようだ。そして、賛成、反対がはっきりしていたので、厳しい活発な議論が展開された。これはバイオカフェでも経験済みで、スピーカーのジャーナリストに一言言いたい参加者が数名参加したときに、知らない人同士でも活発な厳しい議論になってしまった

ことがあった。タイトルがチャレンジングだと、そういうメンバーが集まってしまうこともあるということだろう。

以上より、イギリスの人々が社交的で、横方向のディスカッションがいつも自然に広がるとは考えにくいというのが、筆者のたどり着いた結論である。また、そのような状況をファシリテーターが無理に牽引する様子がなかったことも印象に残っている。どのスピーカーも話術に長けていて、スピーチが簡潔でスライドが少なかったことは、いずれのカフェでも共通していた。一般に日本のスピーカーは熱心なあまり、スライドが30～40枚またそれ以上になり、時間オーバーすることが多い。現在日本では、サイエンスコミュニケーター養成講座などが開かれている。特別なスキルを授けられたコミュニケーターが加わると、議論の不得意な日本人が急に活発に議論をするように思ってしまう人もいるのではないかと筆者は感じることもある。しかし今回の視察で再確認したのは、一般の人々とのコミュニケーションはとても難しく微妙なもので、ケースバイケースで丁寧に行っていくしかないということであった。

参考文献

- 1) バイオカフェホームページ
http://www.life-bio.or.jp/biocafe/index_cafe.html
- 2) カフェシアンティフィークホームページ
<http://www.cafescientifique.org/index.html>
- 3) 北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット(2006)サイエンスコミュニケーションワークショップ in Sapporo 報告書
- 4) ダナ・センターホームページ
<http://www.danacentre.org.uk/>
- 5) 田代英俊：サイエンスコミュニケーションの場として機能する博物館—欧米の博物館における先進事例その1—、バイオサイエンスとインダストリー、65(1), 41～44 (2007)